

この素晴らしい灰の心は折れている

最初の死者ニート

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もう心が折れた。

幾らやつても結果は死。

弓で蜂の巣にされ、転落し、呪い殺され、斬り殺された。

大槌で叩き潰され、エスト瓶を封じられタコ殴りにされ、大弓でたたき落とされ…

そして今もまた、挑戦し、忌々しい赤い侵入者に殺されようとしている。

もう疲れた、戦いたくない、殺してくれ、楽にしてくれ。

その願いを聞き届けるようにそいつの獲物は振り下ろされた。

目 次

心折れた者	18
心折れた者と旧友	15
心折れた者と回想	12
心折れた者と理由、そして首無し騎士	7
パーティー入り	4
ボス戦	1

## 心折れた者

ギルドの酒場、その隅の席にて、その女は居た。

薄汚れた騎士甲冑に中盾を背負い、そして直剣を鞘収め持ち歩いているものの、戦闘意欲などを感じさせず、まるで長生きした老人のような疲労感を漂わせながら。

料理を頼んで食べてるわけでも、だからといってバー・ティーメンバーを待つて いる訳でもない、そこにいるだけの騎士。

周りでは“臆病者の騎士”などと呼ばれている。

クエストに行つてない訳では無い。

だが彼女が受けるのは決まってそこまで難易度の高くないものだ。ジヤイアントトードの討伐などを受け、成功して帰つてきたら報酬をもらい、また席に戻る。

その生活を繰り返している。

他にすることといえば、話しかけてきた者に霸氣を感じさせない疲れたような声で喋るか追い返したり、初心者にアドバイスと皮肉を送つたり、または金をあげたり…人として悪いことはしていない。

周りからの印象は、ステータスはいいのに積極的にクエストに行かず、その才能を捨ててしまっている人、という印象だ。

そんな彼女の話だ。

私は今、困惑している。

目の前の青髪の美少女は困惑している私を他所に未だよく分からぬことを喋つている。

この世界のアクシズ教、その御神体である女神アクアだと言うのだ。

…だが残念ながら私が崇拜するのは太陽だ。

そういえば久しぶりに英雄グンダの前で太陽の戦士として手助けに行きたいな。

まあ：輪の都すら攻略できない私が居ては足でまといになるかもしないが。

話が逸れた。要約すると目の前の美女…アクアはお金を貸してほしいらしい。

別にそれはいいのだ、いつもの事だし。

ただこれだけは伝えておくべきだろうか。

「お金を貸すのはいいが、私が信仰するのは太陽だけだ…」

「あ、すみません…」

「…幾ら欲しい。」

「えっと、二千エリスほど…」

「…持つていけ。これだけあれば宿代と、最低限の武器…まあ短剣を買つても足りるはずだ。」

と、私は五万エリスを渡す。

「え!?こんなに貰つていいんですか!?!」

「構わない…どうせ私には無用の長物だ…連れがいるのだろう? もう行け…貴公らの旅路に太陽の導きがあらんことを…」

「あ、ありがとうございます!」

お辞儀をしてからバタバタと駆けていくアクア。

奇怪な格好をした少年が渋い顔をしながらアクアを見て、暫く会話をした後に思いつき頭を叩いた。

アクアを引き摺つてこちらへ歩いてくる少年は非常に申し訳なさそうな顔をしながらこちらへ頭を下げた。

「この駄女神が迷惑かけてすみません…全額返した方が…」

「いや、構わんよ…本当に無用なのだ…」

「ありがとうございます…!」

実に律儀だ。

私がいたところでは狂った闇靈として入り、ホストに残り火を99個ほど渡して、共に攻略しよう! と剣に誓つてをやつたにも関わらずバツクスタブから白靈と共にタコ殴りにしてきた者もいた。

あれは素直に泣きたくなつた。

…まあそれはいいだろう。

少年はそのままギルドの受付へと歩いていく。

冒険者登録のためだろう。

私は暫く席を外すことにしてた。

そろそろ風呂へ入らねばならない。

風呂というのは最初は馴染めなかつたが、まあ身体が清潔になるのは素直にいい事だ。

誰もいないう間にしか入れないが。

亡者という訳では無いのだが、生憎全身傷だらけなせいで普通の女性には見せてはいけない。

その後、ギルドでちょっとした騒ぎがあつたらしいが私は知らない。

## 心折れた者と旧友

やあ、御機嫌よう。

私は今、とある店の前に来ている。

そこはあまり人通りもなく、商売には向いていない場所だ。  
その店の名は、ウイズ魔法店。

店主のウイズとは、彼女が現役時代から共に戦ってきた旧友だ。  
もちろん彼女が今どんな存在かも知っているし、彼女は私がどんな  
存在かも知っている。

今や似たような存在だ。

で、私がなぜここに来ているかというと、まあ挨拶の為だ。

私にとつてウイズのような正常な友人というのは少なかつたから  
新鮮だし、心の癒しになる。

折れている心だが、少しは癒しが欲しいものなのだ。

暗月の剣達がヨルシカをずっと見ているのと似たようなことだ。

ウイズはなんというか、小動物的な可愛さがある。

現役時代も氷の魔女などと言われてた彼女だが冷たい鉄仮面の下  
では感情が渦巻いて陰でしょんぼりしているのだ。

そして鉄仮面の下で喜ぶこともあつた。

ここに来てたらはその鉄仮面がなくなつて感情が顔に出ていて  
まあなんとも可愛い姿が見られるのだ。

まあ要するに、私にとつては眼福である。

で、友達としても聞き上手なので優良な友人だ。

残念ながら私の友といつたらアンドレイ、カルラ、コルニクス、グ  
レイラット、パツチくらいしかいない。

…とは言つても、グレイラットは途中から盗みに行つた後に死んで  
しまい、カルラはここまで聞き上手という訳では無いし、アンドレイ  
とは専ら武器の話しかしないし、コルニクスとは呪術の話くらいしか  
しない、パツチとの会話というのはどちらかというとセクハラ発言を  
引っぱたいてやつてているくらい。  
つまり新鮮なのだ。

：別に私は構わないのだ。

彼らとの生活は嫌ではなかつたし。

閑話休題、店に入る。

すると棚の瓶を磨いていた女性、ウイズがこちらを向き  
「ああ、ファランちゃん。いらっしゃいませ！」

「…ちゃんはやめて欲しいのだが…」

こうやって、ウイズは私をちゃん付けで呼ぶ。

確かに背丈は低いし、身体的には少し幼めだが、精神年齢は化石レベルだ、恥辱で死ぬ。

ちなみにファランというのは現役時代に使っていた武具の名前を  
借りたもので、ファランの不死隊の装備を一式、そしてファランの大  
剣と短剣を使っていたのだ。

だからファランと名乗っていた。

今は装備は大幅に変わっているが、名前は変わらない。

何故変えたか？：盾がないと戦えない。

狼騎士の大盾も考えたが、仮にもファランの装備を着ているのだ、  
なのに彼らの戦闘スタイルとは違う戦い方をするなど、彼らへの侮辱  
だろう。

確かにたおした死体に向かつて糞团子を投げるような奴らも居た  
し、それどころか騙して悪いがしてから糞团子を投げてくる狂つた闇  
霊もいた。もう奴らは信用しない。

まあ要するに彼らに対する侮辱は嫌だから装備とともに変えたの  
だ。

それからはまあ、現役時代の話と商品をざつと見て周り（爆発ボーキヨンは興味深かつたので幾らか買っておいた）、また私のアイテム（丸薬やエンチャントアイテムなど）を見せて、これをなにかに使えなんかの考察などなど…楽しい時間を過ごして暫く、突如警報が鳴り響いた。

とは言つてもこの時期だ、キヤベツ収穫だろう。正直レベルがこの  
世界の基準で180を超えてる私には勿論、純魔で、私とウイズが  
共同で作つた魔力の結晶槍やら、魔力の奔流やらをもつてゐるウイズ

にも最早キャベツは必要のない存在だ。

それにリンチされて死にたくない。

前者より後者が本音と言つてもいい、昔一度キャベツどもに群がれ殺されたことがある、あれは恐ろしかった。

「あれ？ フアランちゃんは行かないんですか？」

「だからちゃんは…もういい…私にとつてはもう無用だからな…金もそこまで困っている訳では無い。」

なにせ食費がないからな、金は何にも消費されない。

だがカタリナのジークバルトがやつたように、真似事が嫌いという訳では無い。

酒を友と飲むのは純粹に好きだ。

ただ、それはなにか大きな戦闘があり、それに勝利した時だけだ。

「…そろそろ私はギルドに戻る。別段なにかやることがある訳では無いが、なに、なりたての者がいたら基本的に私の方に来るからな。居なかつたらなにかと困るかもしねん」

なぜ私のところに来るかは定ではないが、なぜなのだろうか。

「わかりました。それじゃあ、また今度、フアランちゃん。」

「……ああ、また今度、ウイズ。」

## 心折れた者と回想

装備に間違いはなかつた。

信仰50、太陽の光の槍なども太陽の長子の指輪などでブーストし、無名の王の竜を数発で屠ふ威力にし、ロングソードを雷派生にし、これも同じく無名の王の竜を致命三回で屠る。

竜紋章の盾でブレスにも対応し、死角は無いはずだつた。だが、倒せない。

一回目はブレスの後のレーザーで盾を構えた腕ごと両断され、認識もできずに死んだ。

二回目はレーザーを回避した後横薙ぎ（周囲の地面へ向けたレーザーと言つた方がいいのか？）もギリギリで回避し、頭を狙うと回避が遅れるため足を攻撃していたら奴が動き、尻尾に全身の骨と内臓をぐちやぐちやにされ吹き飛ばされ死んだ。

三回目は尻尾に攻撃されないよう立ち回つていたが、ブレスと勘違いし噛みつかれ、下半身を噛みちぎられて痛みに悶えているところを食われた。

四回目は…

五十二回目は、後一步のところで死んだ。

太陽の雷の槍を頭に一発ぶち込めば死ぬところまでいつたんだ。その時は瀕死でエストももうない、灰瓶も使い切り太陽の光の癒しも使えないほどだつた。

だが雷の槍は使えた、ギリギリなもの、一発は打てる。私は雷の槍を奴の頭目掛けて投げた。

ブレスが終わり、レーザーを放つ直前だつた。

当たる直前、やつはレーザーを放ち私の右半身をもつていつた。だが、当たつた、死んだだろうと思つていた。

だが奴の体力は本当に少し、十数くらいだろうか？残つてしまつた。

私はそれに絶望しながら、横薙ぎのレーザーに上半身を消し飛ばさ

れ死んだ。

悲しみすらなかつた。

もういいじやないか。

ゲールを殺し、顔料を絵描きに届け、火も何度も継ぎ、奪い、消した。

螺旋の運命から逃れられないのは最早良いとして、なぜ私はここまで奴に：ミディールに挑まねばならない？

フィリアノールはもういない、なら既に亡き者の願いを叶える道理はないだろう。

ミディールが闇に呑まれようが知つたことではない、勝手に滅んでくれ。

いいじやないか、もう。

ラップは救つた、ヨエルも救つた、誰も彼もを救つた訳では無いが、救える者は全て救つた。

願いも聞いた。

火を繼いで、火を奪つて、火を消して。

もう、いいじやないか。

気が付いたら火継ぎの祭祀場に戻つていた。  
王たちの薪が玉座の上にある。

それは私が幾度と無く同じことをして積み重ねたもの。

だがそれが今の私には、ただの生贊共の亡骸にしか見えなかつた。無性にかつての知り合い達と話をしたくて、アンドレイやカルラ、パツチや火防女に話に行つた。

まあ、私は特に何も言わなかつた。

ただ一言「ありがとう」とだけ行つて、私は祭祀場を出た。

まるで逆戻りするように私はかつてグンダが居た場所、そして自分が目覚めたところに来た。

ああ、篝火の火などではない。私が帰るべきはここなのだ。  
倒れ込むように底へ沈むと、ああこれが何とも落ち着く。

このまま狂つた亡者になろうがどうでもいい。

ただ、此処で眠らせてくれ。

侵入者にすらまるで赤子の手をひねるように容易く殺されるような者はいるだろう？

優位に立つてなお勝てない者はいるだろう？

瞼が落ちていく、それに抵抗することもなく、ただ視界が暗転するのを待つた。

ああ、安らかな眠りなんて何時ぶりだろう。

眠ることがまずなかつたな、なんて思いながら、私は眠つた。

静かに、甲冑の中で寝息が反響するのを聞きながら。

生贊の道なんて目ではない、とても美しく、そして私が不死になる前、ただ静かに騎士であつた父の趣味の農作業を見ていた少女であつた時に何度も見た懐かしい風景。

最早風化しよく思い出せないその光景が酷く懐かしく、しばらく見入つていた。

しばらくして我に返り、ここに居てもなにも始まらないだろうと考え、歩き出した。

方角もなにもわからぬいため兎に角歩いていると、巨大な壁と、その前でスケルトンの大群と戦う人間を見た。

スケルトンで真っ先に思い出したのはカーサスの戦士達の亡骸だ。彼らは強かつたが、ファランの大剣でこちらが先手をとつて封殺できたな、と考えフアラン一式、ファランの大剣、生命の指輪+3、狼の指輪+3、狩人の指輪、騎士の指輪をつけ、スケルトンの大群の後ろから奇襲する形で攻撃を開始する。

カーサスの戦士達を想像していた私にとつて、そのスケルトン達は異様に脆く、短剣を地面に突き立て大剣を振り回しているだけで殲滅は余裕だつた。

指揮官のような奴もいたが、スカしたようにみせかけ攻撃を誘い、回転薙ぎで楽勝だつた。

その時の私は純粹に驚いていた。

何故こんなに脆いんだ？と。

こんなに無双できたのは久しぶりだった。

いつもこうできればなんと嬉しいことか。

さて、まだスケルトンは残っている、殲滅せねばと後ろを見れば、ちようど「私は純魔で、結晶槍は即死級威力です」と言うような見た目の女が襲われそうになっていた。

こちらにまるで「バクスターをしてください」とでも言うように背中を向けて。

そんなにしてほしいならしてやろう、ということで後からゆつくり近付き背中にドスツと大剣を突き刺し無力化。

純魔は無事らしい、少し啞然としながらこちらを見ている。

まあ無事なら良い、言葉を交わすことなく私はスケルトンの群れに突つ込んで中心で回転するだけの簡単なお仕事に戻った。

結果、数十分でスケルトンの軍隊は殲滅された。

久しぶりに無双ができた喜びと心地良さは絶頂に値する。爽快感、圧倒的爽快感。

これが私がしてきたことか！

これが奴らの気持ちか！

これがミディールの気持ちか！

そこらの石を蹴り飛ばすように私の命を刈り取っていた奴らの気持ちか！

ああ、なんと素晴らしい気持ちだろう！

感謝を！をしながら私は心中で叫ぶ。

ああ！神よ！私をこの世界に送った神よ！感謝します！貴方からの命令ならば、たとえどんなことでも成し遂げましよう！神敵を討てというならば、その者達の耳と舌を捧げましよう！

——え、そんなことしなくていいです

ですか：

と、神のお声を聞いていた私は「あの…」と声をかけられやつと我に返った。

「…なんだ。」

「先程は助けてくれてありがとうございます。私はウイズと申します。あなたの名前は？」

…名前、名前か…

本当に今更だが、私は名前を忘れてしまっている。

…適當でいいか、装備から貰おう。

「ファラン。しがない旅人だ。」

旅はしている、嘘は言つていない。

「ファランさんですか、よろしくお願ひしますね。」

「ああ。」

その時、私はこのウイズと長い付き合いになるのだが、今は語るべきではないだろう。

こうやつて振り返ると自分はなんであのような能天氣さでスケルトンに戦つたんだろうと思う。ファランだ。

こうやつて現実逃避をしていることには理由がある。

私の目の前には厳つい男がいるのだが、この男、席がないから私に席を譲れというのだ。

しかも長々と自分のあきらかに作り物の武勇伝を言う始末。

竜なんぞ私でもこの世界でも、前の世界でも倒したぞ。技バサ舐めんな。

「私は席を譲る気は無い。ここは私の特等席だ。」

と何度も伝えているがその度に「生意氣なんだよ約立たずが」と言つてくる。

まずお前とあつたことすらないというのに

私はよくこうやつて絡まるが、ウイズがいるからな。元気にやつていこうと思う。

あ、だが厳つい男は容赦しない。

少し話し合つてもらつたが、わかつてくれたようだ。

# 心折れた者と理由、そして首無し騎士

最初はただの善意だった

——その、火を継がないところの世界はなくなるんですか？……やります。私には、父の剣技と武具があるんですから。

その次は、友愛故だつた

——私に任せてくださいよ！私には絶対にできるんです！

そして、絶望だつた

——継いでも、継いでも、繰り返し……もう……やだよ……もう、いつその事……

心は更に絶望に沈んだ

——どうして？どうして？私何度も死んだよ？まだダメなの？

助けてよ、神様……

そして、諦めた

——ああ……そうだよ……私なんて……

自身を押し潰しながら

——ごめんなさい、ごめんなさい。でも、私はやらなきやならないんだ。

寄り道もしながら

——ああ、そうだな。あの爺、早く来るといいな……

しかし使命を全うし続けて

——これで……何回目だ……

だだ、終わりが来るのを願つた

——まだか、まだか……もつと、継がねば、消さねば、奪わねば

友との友好関係すらろくに築こうともせずに

——ああ、この武器を、だ。……無駄話はやめてくれ。私には時間が無いんだ

——そうか、いいだろう。行つてこい。

——これが炸裂火玉か。よし、次はこれを教えてくれ  
——結晶槍か……いい思い出はないな。次はこれを…

——闇術：確かにこれは禁忌だろう。だが、私にはそれを気にする余裕なんてないんだ。

——これが家路、か…骨片を使わないで済むのは便利だな。  
まあ、私はこつちを使うが…  
私という個は、どこに行つたんだろう？

きつと燃え尽きたんだろう。

ここにいるのはただの燃えカス、要らない廃棄処分品だ。  
…だが、あの素晴らしい世界は私を必要としてくれる。  
そして、あの女は、私を必要としてくれる。  
友として見てくれるんだ。

だからこそ

「退く訳には…」

目の前から奴の剣が振り下ろされる。

だが、奴は片手持ち、私の騎士盾はパリイができる。

「いかんのだッ!!

「なに?」

奴の剣は明後日の方向に突き刺さり、大きな隙を作る。  
その間を見逃すほど私も愚かではない。

奴の鎧と鎧のあいだ、そこを狙い剣を突き立てる。

もつとダメージを伸ばすよう更に押し倒すように深く突き刺し、引き抜く。

ズズメバチの指輪はやはりこういう時に輝くな。こういう時にしか使えないが

「ぐ…まさか、俺の剣を受け流すとはな…」

目の前のデュラハンは平然と立ち上がった。

この街に突如押しかけたデュラハンはなんでも、爆裂魔法に悩まされているらしい。

怒るのは当然だ。

だが、呪いをかけようとするのであればこちらも見過ごすわけにはいかない。

…などと、カツコイイ台詞を言つてゐるが、私ももはや満身創痍。

血が流れて止まらん。

「気に入つた。今日のところは退いてやろう。まあ、爆裂魔法のことは注意した。もう会うことはないだろう。」

「ありがたいな……こつちは死にかけなんだ、その言葉に甘えよう。」

デュラハンは馬に跨り、城へ戻つていく。

それまで立ち続けていた私は奴が見えなくなつた途端、力が抜けたよう膝をついてしまつた。

どうやら、相当体力を使つていたらしい。

なにせ奴はスタミナの限界がないかのように、ずっとブンブンブンブン振り回してくるんだ。

盾受けの私では部が悪かつた。

……なんだろうか、記憶の奥底にそんな敵が居た気がする……思い出さないでおこう。頭痛が酷い。

全く……

「これから、どうするか……」

空のエスト瓶を見て少し悲しくなりながら、そんなことを考え始めた。

## パーーテイー入り

「すいません、付き合つてもらつちゃつて。」

「いや、いいんだ。ゾンビメーカーと誤認され、討伐クエストまでださ  
れているのに一人は危険だからな。」

ウイズが墓を浄化するのを見つつ「さすが私のウイズ、聖人だ。可  
愛い」と心の中で呟く。

金の亡者とは違う、無償で、善意で、こうして浄化している。  
だがそんな彼女はゾンビメーカーと誤認されてしまったのだ。  
いつも、どこにでもいる。

ろくに調べもせず、見ただけでそれが正しいと考えるバカが。  
…よし、今のセリフ、かつこいいのではないだろうか？

もしもクエストを受けた者が居たら、こう言つて戦闘を開始しよ  
う。

まあここはアクセル、あんなクエスト受けるものは  
「ああああああああああああああ！」

……居たらしい。

走つてくる者が近づいてきた時、ウイズの前に立ち盾を構えた。

「いつも、どこにでも「くらえリツチー！ゴッドブロオオオオオオ！」  
ウブツ!!」

盾を構えているにも関わらず私は吹き飛ばされた。

セリフの途中に攻撃するとはどんなやつだ。

それより、なんという威力だろうか？腕の骨が折れた。

ウイズに助け起こされながら（勿論腕はそのまま）襲撃者を見る。  
あれは：カズマ一行だ。頭のおかしい紅魔族もいるし、確か：自称  
酒の神のアーヴブリーストもいるし、変人クルセイダーもいる。

「いきなりどうしたんだよアクア！」

「リツチーよカズマ！おのれリツチー！人を盾にして拳句さらには使お  
うとするなんて卑怯な！」

「アクア、私には女性を守ろうと盾を構えて片腕を犠牲にした勇敢で  
可哀想な騎士とアクアに怯えながら騎士を助け起こしている心優し

い女性にしか見えないのですが

「ゲホツ、ゲホツ…い、いつも、どこにでもいる。人の話を遮り攻撃をしてくる狂犬が…」

「ファ、ファランちやあああん!!」

ウイズの絶叫を聞きながら私の意識は闇に落ちた。

「…で、全部話した、と。」

焚き火の前で私は貧乏搖すりをしながら話を聞いていた。

あの後ウイズは助かるために洗いざらい吐いたらしい、ちなみに私のことも。

まあ、私が怒つてるのはそこではない、ウイズはしつかりとしてる、少なくとも生き残る手段をしつかり選べるのだ。

「ところで、金を貸した者相手だというのに話も聞かずに神の一撃を見舞うとはどういうことだ？狂った闇靈でももう少し話が通じたぞ、まさか、ダークレイスやホークウッドの類ではないだろうな？」

ホーカウッドは恐ろしかった、あれほどの腕をもちながら何故心が折れたのか、どうせならあの技量を私に分けて欲しい。

というか光る竜頭石はもう持っていたからあげると言つていたのに話も聞かずに殺すとは何事か、哀しかつたぞ、あれだけ二人で話し合つたじやないか。

「えつと、その…ごめんなさい。」

「謝ればいいのだ。：ああ、そうだ。いや、こちらも謝ることがあつた。騙していて、悪かつたな。どうかこのことは他言無用でお願いしたいんだが…」

「だが、ファラン殿、私はこれでもエリス教徒だ、この街にアンデツドがいるのは…あまり好ましくない。」

険しい顔のダクネスが言う、まあ確かにそうだろう。  
「じゃあ…そうだな、私が貴公らに協力する、報酬も全てそちらにあげよう。それでどうだろうか。」

と、カズマに言う、彼は確かパーテイメンバーが変態揃いで困つ

ていたと聞く、これならばのつてくれるのではないだろうか。

実際、ダクネスが好ましくないと言つてゐるが、これでも私達は人類に危害を加える氣がないのだ、許してくれるはずだ。

しばらく悩んだ後に、やつとカズマは結論を出してくれた。

「…そうだな…うん、そうしよう。ダクネス達もそれでいいか？」

「私は構いません、カズマ。」

「まあ…敵意もなさそうだしな、慈悲も必要か。」

「…」

さて、大事な神の結論がまだだ、地味に心配だぞ、私は。

「…ああわかつた、わかつたわよ、だからそんな目で見ないでよ！」

ついに気負けしたアクアがイエスの返事を出した、やつたぞ。

「ありがとうございます、では、これからよろしく頼む、カズマらよ。」

これにて私とウイズが追放される危険はついえたといえる、まあいざとなれば私が暴れるだけだが：

## ボス戦

あれから翌日、私はギルドの指定席で座っていた。

周りからの視線が痛いのはきっと私の装備が起因している。

まあ当然だ、これでも王都で一時期二つ名を授かるほどに活躍してたのだ、何故かはわからないが不吉の象徴とされながら。

この世界でもこの兜は不吉の象徴になるらしい、ファランの不死隊には申し訳ない。

さて、そんなことを考えながら時間を潰しても中々カズマ一行は一向に現れない。

酷く暇な私はふと、ある者を思い出した。

あのデュラハン、結局殺していないな。

あれがいると高難易度のクエストしかでないだろう、カズマ一行がドラゴンの討伐に行くわけもなからうし、下手をすれば何もしないかもしねれない。

そうすれば金の浪費だけが加速する、私も今は懐が寂しい（ウイズのところで溶かしてきた、爆発ボーションが木箱合わせて1009個だ。投げ放題だな）ため、彼らに援助ができない。

私は仲間を大切にする質だ、折角ウイズ以外のパーティーメンバーが出来たのに餓死させるなんて嫌だぞ私は。  
ならば、奴を倒すしかあるまい。

もしかしたらあの異形のソウルを鍊成して何か出来るかもしれない、あの大剣、リーチ長い上に直剣レベルの速度で振れそ удだし気になっていた。

そうと決まれば、早く行こう。異形のソウルを早く鍊成したいのだと私は。

道中、これではソウルを求める亡者と同じだと考え直して正気に戻った私だが、些か遅かつたようで、既に城の前まで来ていた。

目の前には重厚そうな扉があり『いかにも』な雰囲気を醸し出してる。

うわあ、やだなあと思うがここまで来たら引き下がれないだろう、さつきから視線を感じる。

ここで退けばファランの不死隊の印象がががががが……ええいやつてやる、やつてやるぞ。

扉を蹴りやぶ

トツ：

「……」

蹴りや

トツ：

「……」

【◎扉を開ける】

ギギギギギツ…ギイツ  
よし、行くか。

「よく単独で来ようと思つたな。」

「ソロプレイは慣れている。」

スケルトンなどをグルグルで薙ぎ払い続け、そしてやつてきたボス部屋。

霧をくぐり抜けた先では、奴が座から立ち上がり大剣を手に取つているところだつた。

「俺をそこら辺のモンスターだと思つているのか？だつたら相手が悪いかったな。」

「私にとつてはその辺のモンスターの方が初見殺しボスじゃない限り厄介なんだがな……」

初見殺しボス／大量の敵／ただのボス、これは不死人の間では普通だろう？

「まあいい。俺も騎士の端くれだ。隠れもせず堂々と来た相手には敬意を払う。」

そう言い、奴は丁寧な礼：いや、開戦礼を行つた。

私もそれに倣い、同じく開戦礼を行う。

「……では、行くぞ！」

【裁かれた騎士  
ベルデイア】とのボス戦の始まりだ。